

平成27年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「プロジェクト型」の共同研究 研究報告書

平成28年4月27日現在

研究課題名	ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究				
申請者 (代表者)	氏名		所属機関・職		
	井上貴子		大東文化大学国際関係学部・教授		
研究構成員		氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
	1	井上貴子	大東文化大学・教授	インド文化・芸能史	研究総括
	2	中村唯史	京都大学・教授	ソ連文化論	ロシア哲学思想
	3	松川恭子	甲南大学・准教授	インド・文化人類学	インドのキリスト教
	4	村上志保	立命館大学・嘱託講師	中国・文化人類学	中国のキリスト教
	5	井上岳彦	北海道大学・専門研究員	ロシア史	ロシアのキリスト教
	6	望月哲男	北海道大学・特任教授	ロシア文学	アドヴァイザー

研究成果の概要

長崎での研究合宿

2015年8月31日(月)、9月1日(火)、2日(水)の3日間にわたって長崎市で研究合宿を行った。初日は、長崎カトリックセンター会議室にて研究会を開催した。まずは2名の若手研究者による、長崎のキリシタンとイエズス会の活動に関する研究報告、深堀彩香(愛知県立芸術大学 博士後期課程)「イエズス会の東洋宣教と音楽——16世紀のゴア、日本、マカオをめぐる」、ティンカ・デラコルダ川島(山口大学他非常勤)「Politics of the Sacred in the Heritagization of Churches and Christian Sites in Nagasaki」が行われた。ついで、本プロジェクトの研究構成員の研究報告、中村唯史(京都大学)「オリガ・ベルゴーリツ『昼の星』(1959)に見る正教神学と旧教徒伝承の影」が行われた。その後プロジェクト構成員全員が研究の進捗状況を20分程度報告し、最後に総合討論を行った。2日目は、長崎純心大学人間心理学科教授で長崎大司教区司祭の古巣馨神父による解説と、同じく五島の土井ノ浦教会主任司祭の鶴崎伸也神父の案内により、長崎において大村氏・有馬氏がキリシタン大名となり、その後、キリシタン迫害を経て島原の乱(1637-38年)に至るまでの約75年間の歴史を、島原半島の史跡等の訪問によって辿るものであった。訪問先は、キリシタン墓碑、日野江城跡、有馬セミナリヨ跡、原城跡、口之津港、南島原市有馬キリシタン遺産記念館、カトリック島原教会である。3日目は、長崎市内のキリシタン関連施設を訪問した。まず、日本26聖人殉教地と記念館を館長のレンゾ・デ・ルカ神父の解説と案内により見学し、その後、サント・ドミンゴ教会跡資料館、大浦天主堂、旧羅典神学校(資料館)、グラバー園を訪問した。

研究成果の概要（続き）

この研究合宿では、島原半島の史跡見学の際に行われた古巣神父による長崎キリシタン史に関する詳細にわたる解説に対し、プロジェクトメンバーは大きな感銘を受けた。日本におけるキリスト教受容に関する苦難の歴史の詳細を長崎の地元の専門家から学んだことは、他地域におけるキリスト受容の歴史について考察する上でも非常に有意義であった。

スラブ・ユーラシア研究センターでの研究会

2016年2月20日(土)、21日(日)の2日間にわたって北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで研究会を開催した。この研究会は本プロジェクトメンバーによる一年間の研究成果の報告を主とするものである。1日目には、高橋沙奈美「救世主としての最後の皇帝ニコライ二世」、井上岳彦「ヴォルガ下流域における宣教師と現地民による文通」、村上志保「中国におけるプロテスタント教会—政治的圧力と教会の受容・変容—」、中村唯史の研究経過報告が行われた。2日目には、深堀彩香「音楽面からみるイエズス会の東洋宣教—16世紀半ばから17世紀初期におけるゴア、日本、マカオを対象として—」、井上貴子「南インドにおける教会と聖歌—公共圏論をてがかりに—」、松川恭子「インド・ゴアにおける聖人信仰の現状」の3報告の後、アドヴァイザーの望月哲男によるコメントと総合討論が行われた。

本プロジェクトの結果

主にロシア・中国・インドにヨーロッパからキリスト教がもたらされ、それが各地の信仰生活にいかなる影響を与え、土着の文化の影響を受けていかに変容し定着しているのかを比較分析することの重要性が再確認された。今日、ユーラシア地域において大国としての存在感を高める各国の文化の相互比較は重要かつ困難な課題である。中でも宗教をめぐる諸問題は、対立と連携を強めるグローバル化する世界の政治課題としても浮上している。したがって、キリスト教の受容をユーラシア諸国に共通する経験として抽出し、その分析に基づいて各国の地域文化の相互比較を可能にする有効な理論的指標を提示することは、こうした現代的要請にも応えるものである。今後も以下のような点に注目しながら、共同研究を継続していくことが合意された。1) 宣教師の活動、2) 人々の信仰体験、3) 宗教的シンボリズム、4) 土着思想との融合と確執、5) 政治社会体制との関係 等。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）

Inoue Takako “Constructing Communities of Devotion and Affection: The Role of Churches in India.” International Conference Organized by FINDAS, Daito Bunka University, Acharya Bangalore B School, *Social Transformation and Cultural Change in South Asia: From the Perspectives of the Socio-Economic Periphery*, 2016.11.14, at Daito Bunka University.

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

平成28年度(2016年度)基盤研究(B)(一般)「ユーラシア諸国におけるキリスト教の受容と土着化に関する比較研究」(研究代表:井上貴子)不採択(来年度、再度応募を検討)

平成28年度(2016年度)基盤研究(C)「上海市経済特区における中国プロテスタントの宗教生活の変化に関する研究」(村上志保)採用内定

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。